

ニッポン

人・脈・記

建てる 守る 願う ⑩

そこに分け入ってこそ



伊東豊雄さん、せんだいメディアテークにて

アーティストには、その美しさと革新的な技術に触れようと海外からも見学者が絶えない。総ガラス張りの建物は、揺れる海藻のように見える曲がった鉄の管が支えている。

設計した伊東豊雄(70)には、自身の評価を世界に高めるとともに、建物の使われ方に深い关心を持つきっかけになつた作品だ。「お年寄りから子供まで、目的がなくてもきてくれる。いろんな人が、一緒にほつとした時間が過ごせる場所になった」

そのような場所こそ大震災後に必要なのは、伊東は東京から修復に駆けつけ、5月初めて再開にこぎつけた。

仙台市の被災者支援や岩手県釜石市の復興相談に、伊東は足を運び始めた。仙台市宮城野区にできた仮設住宅には「家を失った人と話し、建築を一から考え直したい」と考えて通つた。40平方ばかりの集会施設「みんなの家」を建てるのに協力した。小さなメディアアートのような交流の場を、と思った。

「隣側で隣の人と話し、将棋もしたい」「炊事のできるまごのストーブで、おはあさ

仙台市の「せんだいメディアテーク」には、その美しさと革新的な技術に触れようと海外からも見学者が絶えない。総ガラス張りの建物は、揺れる海藻のように見える曲がった鉄の管が支えている。

2001年に開館、中に図書館や展示・集会場がある。今回の大震災で最上階の7階の天井が落下、図書が散乱し、休館を余儀なくされた。

設計した伊東豊雄(70)には、自身の評価を世界に高めるとともに、建物の使われ方に深い关心を持つきっかけになつた作品だ。「お年寄りから子供まで、目的がなくてもきてくれる。いろんな人が、一緒にほつとした時間が過ごせる場所になった」

後有必要なのは、伊東は東京から修復に駆けつけ、5月初めて再開にこぎつけた。

仙台市の被災者支援や岩手県釜石市の復興相談に、伊東は足を運び始めた。仙台市宮城野区にできた仮設住宅には「家を失った人と話し、建築を一から考え直したい」と考えて通つた。40平方ばかりの集会施設「みんなの家」を建てるのに協力した。小さなメディアアートのような交流の場を、と思った。

「隣側で隣の人と話し、将棋もしたい」「炊事のできるまごのストーブで、おはあさ

後に必要なのは、伊東は東京から修復に駆けつけ、5月初めて再開にこぎつけた。

仙台市の被災者支援や岩手県釜石市の復興相談に、伊東は足を運び始めた。仙台市宮城野区にできた仮設住宅には「家を失った人と話し、建築を一から考え直したい」と考えて通つた。40平方ばかりの集会施設「みんなの家」を建てるのに協力した。小さなメディアアートのような交流の場を、と思った。

「隣側で隣の人と話し、将棋もしたい」「炊事のできるまごのストーブで、おはあさ

後に必要なのは、伊東は東京から修復に駆けつけ、5月初めて再開にこぎつけた。

仙台市の被災者支援や岩手県釜石市の復興相談に、伊東は足を運び始めた。仙台市宮城野区にできた仮設住宅には「家を失った人と話し、建築を一から考え直したい」と考えて通つた。40平方ばかりの集会施設「みんなの家」を建てるのに協力した。小さなメディアアートのような交流の場を、と思った。

「隣側で隣の人と話し、将棋もしたい」「炊事のできるまごのストーブで、おはあさ

んを元気にしたい」。希望を聞いて設計した家は、ありふれた木造の平屋になった。

「自然とともに住む、人とともに住むことを理想とする。誰もが小さくても歯車を動かす仕掛けにはれば、と考える。震災後、伊東は振り返つて思ふ。「建築家は論理がすべてに優先するという立場で、利用者の具体的な要望を無視して新しいものをつくりがちだ。そうした姿勢が、社会が思う。『建築家は論理がすべてに優先するという立場で、利用者の具体的な要望を無視して新しいものをつくりがちだ。そうした姿勢が、社会が

源栄正人さん



針生承一さん

の青森山では地盤の特性のため地震波の特定の周期が大きくなり、建物によってはこれに共振して揺れが異常に強くなつた。建築学科が入る校舎は耐震補強をしたにもかかわらず大破し、使用不能になつた。「地盤特性に応じた、よりきめ細かい耐震対策が急務だ」と痛感した。

東北大学教授の源栄正人(59)は3月11日、地震警報の音で大学院生と研究室の机の下に潜り込んだ。激しい揺れで留めた金もつつかえ棒も役に立たず、壁面の本棚から落ちた大量の本と書類に埋まり、身動きが取れない。内開きのドアも動かなかつた。少しづつ本をどけ、20分以上かかるで研究室外に出た。

02年サッカー・ワールドカップの会場となつた宮城スタジアムで大学院生と研究室の机の下に潜り込んだ。激しい揺れで留めた金もつつかえ棒も役に立たず、壁面の本棚から落ちた大量の本と書類に埋ま

り、身動きが取れない。内開きのドアも動かなかつた。少しづつ本をどけ、20分以上かかるで研究室外に出た。

震災後は、南三陸町で地元の名取市の自宅兼事務所は津波によつて長く間、使えなくなつていた。

震災後は、南三陸町で地元のスギ柱を使つた木造仮設住宅の建設などにあたつた。地元名取市では、人工高地などを使ってできるだけ地元に住み続ける復興計画を、住民側から行政に提案している。

針生には、地域の環境問題にとり組んできた経験がある。被災地で見ると、「一地元重要な役割を怠に演じようとしても、住民の信頼を得るのは難しい」と感じる。

一方で、これから住民が自分たちの復興計画を提案していくには、助ける建築家や都市計画の専門家が地元に決定的責任を果たす経験を積んでいくことにも通じる。建築を一から考え方直す伊東の思いとも重なつてゐる。(大野正美)

■人をめぐる物語をお寄せください。電子メールはjinmyaku@asahi.comへ。